

「中国の喪失」とマッカーシズム〔I〕

丸 山 鋼 二

<目次>

はじめに——戦後のアメリカ外交におけるマッカーシズム

第一節 日中戦争に至るアメリカ人の親中国イメージの形成

- (1) 軽蔑の時代
- (2) 同情と好意の時代（以上本号）

第二節 アメリカの対中政策の対立——1944-45年

- (1) スティルウェル・ガウス路線
- (2) ハーレー政策の基本的前提
- (3) スティルウェル・ガウス路線からハーレー路線へ

第三節 「中国の喪失」に至る道——『中国白書』のディレンマ

- (1) 限定援助政策——内戦期のアメリカの対中政策
- (2) 『中国白書』——アメリカの対中政策のディレンマ

第四節 「中国の喪失」とマッカーシズム

- (1) アメリカの政治的特質
- (2) 冷戦体制の構築——マッカーシズムの前提
- (3) 「中国の喪失」とマッカーシズム
- (4) マッカーシズム後遺症

おわりに——対中冷戦コンセンサスの形成とマッカーシズム

はじめに——戦後のアメリカ外交におけるマッカーシズム

アメリカ人にとって中国は何であったのか？——この問いに答えるには、1950年初頭、共和党系の『サタデー・イヴニング・ポスト』(Saturday Evening Post 1950年1月7日号)が元大尉のジョセフ・オルソップ(Joseph Alsop)

の中国問題記事のタイトルとした“Why We Lost China?”を想起すればいいだろう。すなわち、「中国はわれわれのものであり、だからわれわれがなくしたものと思わなければならないのである。」これこそ、端的に1949年10月中華人民共和国が成立したときのアメリカ国民の感情を表現していよう。なぜアメリカ人は「中国はわれわれのものだ」という特別な感情を持つようになったのであろうか。

その答えは第一章にゆずるとして、そもそもアメリカ人は中国において親として中国を保護する責任を負っていると感じていた。だから、中国が共産主義者の手に落ちたとき、子供たちが道を踏みはずし悪魔の方に行ったと考え、強い罪悪感につきまといわれ、中国で起こったことになんとなく責任があるように感じた。そういう感情の素材があったからこそ、デマゴグの政治家たちが「中国の喪失」をアメリカの政界において騒ぎ立て、政敵を叩くためのもっとも手軽で効果的な武器として使うことができたのである。ここに、「中国の喪失」に至るまでのアメリカ人の中国イメージとマッカーシズムを結び付ける鍵が隠されていよう。

本稿はアメリカの対中政策の決定においてアメリカ人の中国観、中国駐在外交官らの中国認識がどのような役割を果たしたかを、彼らを含めた中国政策決定者たちの認識、アメリカの対中政策の前提となっているもの、および具体的な対中政策を作成する際に彼らが考慮した点を中心にして、1944-50年の米中関係の歴史のなかから検討しようとするものである。戦後のアメリカ外交は、ベトナム戦争介入に至る過程において、アジア情勢や各国の動向を内在的に実証的に分析するのではなく、〈自由主義対共産主義〉という二極対立構造（システム）＝〈冷戦的思考〉を単純にアジアに適用するという、ドグマ的対応を採ってきた。こうした政策的対応を採らしめた最も基本的要因こそ、中華人民共和国の成立を「喪失」と捉えさせ、朝鮮戦争の勃発を中ソ両国による共同謀議であると認識させた〈冷戦的思考〉＝アメリカ政治の「反共イデオロギー」であり、それを国内において確立させたものこそ、マッカーシズムであったと筆者は考えている。それゆえに、以下においては、「中国の喪失」がマッカーシズムを生み出す過程、あるいはマッカーシズムへとつながって行かざるを得ない必然性を、日中戦争に至るまでのアメリカ人の親中国的イメージの形成（第一節）、太平洋戦争末期から中華人民共和国の成立までのアメリカの対中

政策の葛藤・対立（第二節・第三節），そしてアメリカの冷戦外交推進のための国内反共体制の構築（第四節）という三側面から検討し，最後にマッカーシズムがその後のアメリカの対アジア外交においてもった意味を考察する。

第一節 日中戦争に至るアメリカ人の親中国イメージの形成⁽¹⁾

(1) 軽蔑の時代

米中関係の始まりは，1783年アメリカ合衆国の独立によって，母国イギリスに制約されることなく，自由に貿易や海外活動を行なうようになってからである。当時のアメリカは独立したばかりの新進気鋭さに満ち溢れており，旧世界＝ヨーロッパと異なり民主的で進んだ社会という特有の歴史観が顕著であり，中国・アジアにたいしては「停滞」とか「後進性」というイメージをもっていた。こうした中国人を劣等民族とみなす観念は，いわば19世紀の帝国主義的概念，つまりヨーロッパ人だけが支配するように作られており，非ヨーロッパ人は征服されるように運命づけられているというパターンの焼き直しに過ぎなかった。しかし，同時に，アジアはいつまでも停滞せず，発展することができるし，否，手を貸してやるのがアメリカの使命であるという理想主義を当初からアメリカ人がもっていたことは，注目されるべきである。

1840年のアヘン戦争は，中国古代文明に対する崇拜・賞賛の念による＜尊敬の時代＞から＜軽蔑の時代＞へと移行させたターニング・ポイントであったといえる。そこでは，「顔のない大衆」という概念が重要な位置を占めていた。貧困と文盲，悲惨な境遇と慢性的な病気の中にいる，個性を持たない，膨大な大衆というイメージである。彼らは，アメリカ人には理解できない信じられないほどの貧しさの中で生活しているとみられた。

そうした中国人のイメージを最初にまとまった形で出したのが，ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams, 1812—84）の古典的名著『中華帝国』（The Middle Kingdom, 1848改訂版1883）である。彼は，最初のアメリカ宣教師の一人として43年間中国に滞在し，その後アメリカの最初の中国学者となった人物であるが，彼はその著作の中で，「彼らは表面上の上品さを大切にしてくせに，ひどく不道徳で，墮落している。…肉体の罪よりも克服しがたいものは，中国人の虚言と卑しい恩知らずの罪である。…盗みは驚くほど当り前に行

われている。彼らがときたまみせる礼儀正しさは好意から出ているものではないので、うわ塗りが剥げると、地の無作法さ、野蛮さ、下品さが現れるのである。」と中国人を描き、中国の国民性については「もしなにか賞賛に値するものがあれば、それ以上に非難すべきものがある」という「奇妙な混合」を示している⁽²⁾と特徴づけた。

ほとんど同じイメージをもっと体系的な形で提出したのが、宣教師のアーサー・スミス (Arthur Henderson Smith, 1845—1932) の『中国人の性格』(Chinese Characteristics, 1890改訂版1894) という有名な本である。スミスはその本の一章を「神経の欠乏」と題し、「中国人の神経はわれわれがよく知っているものとは全く異なった種類の神経であることは全く明白である」と断定し、「彼らは少しも疲れた様子もみせないで1日中、ひとつの所に立っているであろうし、最も非衛生的な環境の中でもよく育つのである。過密とか、汚れた空気などは、彼らにはなんでもない。彼らは眠るときや、病気の時ですら静かさを必要としない。彼らは餓死するときでも、全く満足して死んでいくのである。」⁽³⁾と述べている。

こうした非人間的な状態に耐えられるほどの非人間的な忍耐力を備えているというイメージは、数の多さからくる人命の軽視とあいまって、中国人は残酷であるという観念と容易に結び付く。この残忍性のイメージは、古くは蒙古人のイメージにまで遡っていくものであるが、とくに義和団事件当時の虐殺や拷問などの生々しい描写や写真により広く大衆にアピールした。この「東洋人の残忍性」のイメージは、1937年から1945年の間、一時的に中国人から日本人に移転させられたけれども、1950年の朝鮮での事態や中国での肅清によって再び復活してくるのである。

このような、アメリカ人のもつ劣等民族としての中国人イメージは、当時よりアメリカ国内に次第にとけ込み始めていた中国人移住者⁽⁴⁾(苦力)からも大きく影響されていたと思われる。今世紀始めの少年時代の中国人にまつわる思い出をある米人作家は、「もちろん中国人ははずば抜けて異質であり、異様な存在であった。彼らは洗濯屋をしており、元来そんなものは男の仕事ではないが、彼らは家庭や子供も持たず、…逆方向から字を書きまた上から下へと字を書いていたし、昼も夜も土曜も日曜も休まず働いたが、これらのことすべてが、彼らが最も異質の異教徒とみられるようになった原因である。」⁽⁵⁾と回想している。

アメリカの中国人は奇妙に恐れられたり、奇妙に感嘆されたりしたが、ほとんど知られたり理解されたりすることはなかったし、仲間として受け入れられたことすらなかった。とくに、1870年代の不況時代には白人によって追い出され始め、1882年には中国人排斥法が制定されるに至った。こうした暴力から逃れて中国人は西部を離れて国中の都市に出来上がった中国人街（チャイナ・タウン）に隠れ、また彼らは安全な職業——洗濯屋・料理店・骨董品店・家事サービス業などに就いて、自分たちの仲間の社会に引き籠って、アメリカ人の目には無反応な無表情さと映った、過度の用心深さに身を置いていた。この中国人の防衛的生活姿勢は、中国人の「不可解さ」という幻影を強めるのに役立った。人で溢れた、蜂の巣のような中国人街は、不道德や犯罪に満ちている暗黒街とされ、その傾向は1920年代に流行した、フ・マンチュー博士というキャラクターが活躍したギャング映画に現れている。

(2) 同情と好意の時代

中国人に対する〈軽蔑の時代〉から〈同情と好意の時代〉へと大きく変わるのは今世紀初頭に至ってからである。経済大国に発展しつつあったアメリカの実業家たちは中国を有望なマーケットとみていた。こうした実業家たちの中国への進出もたんに経済的拡張主義のみでなく、その裏にはまた「ヤング・アメリカ」の理念が働いていたのである。アメリカの経済的進出によって中国は貧困から救われると考え、中国がコーラやナイロン・ストッキングなどに象徴されるアメリカの「先進」文明を享受し発展することを期待していた。こうしたアメリカの理念は1899年のジョン・ヘイの「門戸開放宣言」に現れている。

〈宣教師——保護される者たち〉

しかし、中国に対する「同情と好意」をアメリカ人に植え付けるのに大きな役割を果たしたのは、宣教師であった。一般に中国へ行ったことのある宣教師たちは、中国人に対してよい印象をもった。中国の宣教師たちは、「彼らの」国と国民に対する大いなる感情的愛着を有しているといわれていた。たとえば、ある宣教師は「そこに住んだことのあるすべての人と同様に、私は中国人に対して、温かい、友好的な感情や、大きな賞賛を感じる。…多くの困難にもかかわらず、そこででのわれわれの経験は楽しいものだった。もう一度行ってみたい。」⁽⁶⁾と述懐している。こうした宣教師から、アメリカ人が中国についてよい

印象を受けるようになったのは当然であろう。事実、「中国人がいかに素晴らしく、われわれの助けをどれだけ必要としているか、そしていかに助けを進んで受け入れる人たちであるかという私の考えは、宣教師たちから得たものである⁽⁷⁾」という証言がある。

しかし、そもそも中国での大々的な宣教活動の開始は、アヘン戦争と同時であった。聖書と軍艦は中国に一緒にやってきたのである⁽⁸⁾。宣教活動の利害は、列強の経済的外交的利益と結び付いていた。そのために、大小の教案（反キリスト教事件）にみられるように、宣教師たちに対する反抗は非常に激しいものであった。その中国人の累積された敵意が1900年に爆発した。にもかかわらず、連合軍による義和団の乱の鎮圧は、中国で宣教師たちや外国人が経験した最初の黄金時代へと導いた。この事件から1925-27年の民族運動まで、外国人には安全な時代を迎えたのである。そして皮肉にも、勝者である外国人と、全くの敗者である中国人との関係は、以前よりももっと親切で、同情的で、熱狂的な賞賛に値するという中国像を作り出し、それは今日まで続いている。

義和団事件によって、中華民族としての排外主義が挫折した結果、中国は西洋文明を全面的に受け入れ、外国教育への門戸を開くようになった。その主な流れ先は日本であったが、アメリカも義和団事件賠償金の未使用分を中国における教育目的（米国留学とそのための準備教育）のために用いることを決定し、1909年実施に移され⁽⁹⁾、また民間からの資金も中国の伝導事業を支援するために投じられた⁽¹⁰⁾。1925年までに、燕京大学・輔仁大学（北京）、齐鲁大学（済南）、華中大学（武昌）、金陵大学（南京）、聖約翰大学（上海）、之江大学（杭州）、嶺南大学（広州）など、27のキリスト教系大学が設立された。こうした宣教師による教育の発展の結果、また中国人が伝統的に教師という存在に払う名誉と尊敬のゆえにも、かつてなかったほど多くの宣教師が、中国人に対し極めて穏和かつ同情的な関係を持ち始めた。

＜新華主義者——「中国の友」＞

アメリカ国内において、何百万人のアメリカ人の中国観を変えようとしていたのは宣教師たちばかりではなかった。第一次大戦後の20年間、数多くのアメリカ人が様々な立場で中国に渡った。——実業家、外交官、ジャーナリスト、学者、教育者、あるいは好奇心からの放浪者として。その数は1930年代の最盛時には、1万3000名にのぼった。そのおびただしい数とその多種類の職業のた

めに、アメリカ国内への影響も広範囲にわたり、しかも、彼らの中国への感情は大体において顕著な親中国的傾向を伴っていた。それは「中国に行ったことのあるアメリカ人で、中国に愛着を感じていない人に会ったことがない。彼らは中国に恋をしているようだ。」と表現されるようなもの⁽¹¹⁾であった。

こうした親華主義者は、次のようなグループに分けることができる。すなわち、上述の<宣教師兼教育家>、実業家からなる植民地家的<支那通>、宣教にも商売にも関係ない、芸術品収集家、放浪作家、新聞雑誌記者からなる<北京の人々>、<中国生まれ>などであった。とくに<中国生まれ>の中には、宣教師兼教育家（燕京大学学長）であったが、米中関係の決定的危機の時期に中国大使を引き受けたジョン・レイトン・ステュアート（John Leighton Stuart）、タイム・ライフ社の社主ヘンリー・ルース（Henry Robinson Luce）、アメリカ外交官として延安からも情勢を的確に捉えた報告を送ったが、のちマッカーシズムの槍玉にあげられた、四川省成都生まれのジョン・S・サーヴィスらがいる。

中国居住者ではないが、1920年前後に、バートランド・ラッセル（Bertrand Russel）、ジョン・デューイ（John Dewey）、ポール・モンロー（Paul Monroe）など英米の思想家の訪中が相次いだ。とくに、アメリカのプラグマティズム思想家・教育家デューイの中国教育界、思想界に与えた影響は大きく、胡適の言うように、「中国と西洋文化とが接触して以来、中国思想界に影響を及ぼした外国学者の中で、デューイにおよぶものはなかった」のである。

彼は、1919年5月から21年7月まで2年3ヶ月も中国に滞在し、各地を講演して回った。彼は、上海に到着した1919年5月1日直後の「五四運動」を目撃し、深く感動したのである。また、長期滞在中で、中国とその国民性について「中国はその文明を他から借用したのではなく、自分自身でつくりあげたのである。…中国には、その後進性と混乱と弱さにもかかわらず、日本よりもはるかに現代西洋思想がしみこんでいる」と理解し、中国人の発想にプラグマティズムとの類似性を感じたがゆえにも、終始中国に好感を持ち続けたのである。アメリカに帰国後も、デューイはワシントン会議に対して執筆活動を通じて中国支援の論陣を張るとともに、中国の学校を応援するために財政的援助を提供するようアメリカ国民に訴えた。⁽¹²⁾

＜パール・バック——魅力的な国民＞

また、この世代ではもっとも中国びいきとされたアメリカ人小説家パール・バック (Pearl Buck) がいる。彼女の有名な小説『大地』(Good Earth, 1931) は中国に関するどんな書物よりも、大きな衝撃を与えた。農民である王龍とその妻阿藍の逆境、人間の残虐行為、自然との闘いを描いた『大地』は、中国人を外国人との関係において捉えたのではなく、中国人同士の結び付きを描いたということ、また中国人の中でも一番身分の低い農民を取り上げ、その生きる闘いの厳しさを描いたものであったという点で、中国を題材としたアメリカ文学としては、新しい型のものであった。それが1931年に出版されるや、またたく間に人気を呼び、初版・再版合わせて200万部を超えたといわれる。日中戦争の始まった1937年には映画化され、その後約2300万人のアメリカ人と世界各国で4200万人と推測される人々がこの映画を見たという。パール・バックから得られた印象は、「勤勉で力強く、忍耐強く、どんな厳しい逆境にも立ち向かうことができ、子供に対しては優しく、年長者を敬うといった、全く賞賛すべき人間味に溢れた愛すべき」⁽¹³⁾「気高い中国農民」のイメージであった。それはたんに個人としての中国人というよりも、一般的な中国人像という広いイメージ⁽¹⁴⁾であった。

1930年頃より、ある特定の中国の党派と結び付いた親華主義者たちも活動を始めた。中国国民革命以後、多くの宣教師はミッション・スクールやアメリカの大学の卒業生から成る中国国民党政府の正統性を弁じ始め、ことに蒋介石がキリスト教に改宗し、アメリカで教育を受けた宋美麗と結婚してからは、彼らは蔣夫妻と国民党政府に全面的で無批判な、熱意に満ちた支援を与えた。

他方、民主勢力のイメージ作りに大きく貢献したのがエドガー・スノー (Edgar P. Snow) の『中国の赤い星』(Red Star Over China, 1938) であった。スノーは中国共産党を「農業改革者」と性格づけ、圧制的で腐敗し、頼りにならない蒋介石の国民党政府とは対照的に、厳粛で奉仕的な愛国者としての中国共産党員の印象を、出版部数は計2万3500部にすぎなかったにもかかわらず、多くのアメリカ人、とくにリベラルな知識人の心に刻みつけた。

彼に刺激されて、他のジャーナリストたち、ニム・ウェールズ (Nym Wales)、ユナイテッド・プレス支局長のアール・リーフらが、1937年には『アメラシア』編集者のフィリップ・ジャッフェ (Philip J. Jaffe) 夫妻、トーマス・ビッ

ソン (Thomas Arthur Bisson), オーエン・ラティモア (Owen Lattimore) が延安を訪れ、年末には海軍情報将校のエバンス・カールソン (Evans Carlson) とジェームス・バートラム (James Bertram) が山西省南部に駐屯していた八路軍司令部にやってきた。共産地区を訪問した彼らは例外なく、中国共産党礼賛者となって帰ってきた。

アール・リーフは、「紅軍は素晴らしい」と何度もくりかえし、「共匪だなんてとんでもない。紅軍と中国共産党は、中国人の魂を入れかえましたよ。新しい民族が生まれてきたんです。」と語った。⁽¹⁵⁾カールソンは、中国の共産主義者は「ボルシェビキやナチのような全体主義者であるよりも、(独立戦争当時の)アメリカの民兵」に似ていると感じ、視察の結果、「中国共産党が実行している教義は、政治の面では代議政体 (民主主義)、経済の面では協同組合理論であって、これを人と人との関係に適用した場合のみ、共産主義的と呼ぶことができる。なぜなら社会的平等が強調されているからだ。」という確信を得るに至った。⁽¹⁶⁾

このように、中国で対立する勢力をアメリカの相対立する勢力が代弁するようになり、彼らは中国情勢について政府とは異なる見解を持ち、ついには全く異なる政策を提供し、論争が1950-51年にクライマックスを迎えることについては後述する。にもかかわらず、初期のうちは抗戦中国の意気込みがあらゆる矛盾に打ち勝つかにみえたし、「中国の友」たちも、中国の弱点について語るのをためらっていた。この時はまだ対日抗戦のために両者が協力しようという姿勢が強く、統一戦線は維持されていたのである。

「中国の友」たちは抗戦中国の良き理解者であり、またその支援者であった。彼らは、侵略者と戦うために立ち上がった中国に新生中国の胎動を感じとった。戦いの中で封建的遺制をかなぐり捨てることによって、民主的な中国が誕生することを期待していた。しかし、新生中国に期待を寄せた「中国の友」たちの多くは、国民党政府への失望を深めるにつれて、反対に共産党への信頼を高めた。ニューディールの影響を受け、反ファシズム統一戦線に共鳴していた彼らがアメリカの「自由主義」の伝統を中国に捜し求めた結果、それを中国共産党に見いだしたのである。つまり、自らの理念を中国に反映したものが彼らの中共観であったといえる。この点は、米中関係史において決定的な重要性を占めることになる。

〈抗日戦——立ち上がった英雄〉

1937年秋の、長期にわたる中国人の上海防衛戦の光景は、中国人の堅固さという新しいイメージを鋭く印象づけた。ここに、無限に強大な侵略者に抗して祖国を守るために闘っている英雄的な中国人像が実物大よりも大きく映し出されていく。しかし、いまなお大多数のアメリカ人は、自分は戦争にかかわりたくないと感じる孤立主義的風潮が強く⁽¹⁷⁾、1937年10月5日のフランクリン・ローズベルト大統領の「侵略国の隔離」演説も、当初は支持が得られなかったが、1937年12月の日本軍による米艦パネー号爆撃事件、南京大虐殺といった事態は、アメリカ国民の間にかつてないほどの中国への同情と関心を惹起させた。1938年を通じ、大勢の宣教師・伝導関係者は、中国の窮状に積極的な関心を喚起し、日本向けの軍需物資の輸送禁止を迫るべく猛烈な運動を展開し、アメリカは紛争を避けるため中国からすべてのアメリカ人、軍勢力を撤退すべきだとする従来の根強い見解に反駁した。これらの人々は、日本の侵略行為、中国兵の雄雄しい行為を広くPRし、議会に圧力をかけ、次第に政府の政策にまで影響力を伸長させていった。政府の印刷物やニュース映画を通じ、工場全体をバラバラにして運んでいく苦力たちの長い列、その一人一人が背に荷物を背負い、果てしなく広がっている列に加わって、奥地へ向けて丘陵をとぼとぼ歩いている姿がアメリカ人のもとに届いた。中国奥地からの通信は、「高貴な勇気をもって、途方もなく不利な状況に立ち向かっている」とか「高度に装備された日本軍が絶え間なく攻撃、砲撃を重ねる間中、彼らは一步も退かなかった」というような文句で鳴り響いていた。こうした際限ない誇張と抗日戦を戦っている中国人への同情との中に「中国＝蒋介石」という神話が形成された。中国生まれのヘンリー・ルースの『タイム』誌は蒋介石夫妻を1938年の「時の人」に選んだ。

1941年12月8日のパール・ハーバーでの出来事によって中国がアメリカの勇ましい同盟国となると、祖国を守る英雄的中国人像はさらに広く讃えられるようになった。以後2年間の戦争のニュース、情報、宣伝に映されたのは中国の英雄物語だけであった。1943年蒋介石夫人の宋美麗がアメリカの援助強化の懇願のために訪米した際には大歓迎された。この時期は短くはあったが、中国人への同情的イメージが米中関係のすみずみまで行き渡った時であった。長い侮蔑、寛容の時代の後に今ようやく中国人が賛美された時代と名付けることのできる唯一の時代を迎えたのである。

しかし、実際に行われた対中援助の実情は、中国人が賛美される度合と比例していたとはいえない。ヨーロッパ戦線を優先させていたアメリカは、中緬印戦線には僅かの人材（200余名）と物資しか送らなかった。こうした、親中国的イメージと現実とのギャップは、アメリカの対中政策に常にみられたことであり、後の米中間の歴史に大きくかかわることになる。

＜幻滅の芽生え＞

真珠湾以後に中国に赴いたアメリカ人は、抗日戦を闘っている英雄的中国人像の名残をとどめていた。しかし、かれらがそこで発見したものは、戦争もない代わりに平和も存在しない行き詰まり状態であった。彼らの直面したのは、中国人民の傷つき疲れ果てた姿、中国の大きさと後進性、無数の未解決の問題と矛盾、至るところにみられる腐敗と愚行、大衆の支持や努力を得ることのできる指導力の欠如であった。

1941年末にビルマ公路経由で中国に向かった記者レランド・ストー（Leland Stowe）は、中国の重大な生命線であり、外界との重要なルートであり、かつ生存のための物資の唯一の流入の源であるビルマ公路で、たかりが横行していることに驚嘆した。彼は、「独立のための中国の偉大な戦いには実は黒いしみがある」というジョッキングな現実の衝撃と、それを隠蔽していたアメリカ人の寛大なロマンチシズムについて語っている。

「典型的なアメリカ人の姿勢で中国にやってきた私は、ひどい貧困や汚らしさに対しては全く無防備であった。ただ東洋の問題の複雑さをおぼろげに考えていただけであった。……日本への壮大で、驚くべき中国人の抵抗に熱中したあまり、私の洞察力は他の多くのアメリカ人のそれと同様、著しく曇らされていることに気づいた。こんなにも堂々と戦い続けている人々が、多くの支配層の腐敗や自己本位や無関心のために、不利益をこうむったり、裏切られたりすることもあるものだ⁽¹⁹⁾という事実を、改めて考えるようなことは、とかくしないものである。」

このように、中国に渡ったアメリカ人が中国で不正が行われているという現実にうろたえること自体、中国に関する神話がいかに大きかったかを物語るものであろう。そして、こんなごまかしに引っかかるほどの極端なだまされやすさは、つまり勇敢で人間としてまともな中国人という、中国に関する作り事のイメージを鵜呑みにすることは、当時のアメリカ人一般、ことにいわゆる「自

由主義的見解」を持つ人々に共通していた。彼らの多くが、後の事件に接したときにひどい混乱、ほとんど立ち直れぬほどのショックや裏切り、幻滅を感じたのも、一部にはこうした背景があったからであろう。

- (1) 本節はおもに、ハロルド・R・アイザックス著、小浪充・国弘正雄訳『中国のイメージ—アメリカ人の中国観』(サイマル出版会 1970年 原書はHarold R. Isaacs, *Images of Asia :American Views of China and India*, Capricorn Books, 1962の第一部・第二部)に依拠している。

彼は中国に関するアメリカ人のイメージの変遷を大雑把に、(1)尊敬の時代(18世紀)、(2)軽蔑の時代(1840—1905年)、(3)恩恵の時代(1905—37年)、(4)賞賛の時代(1937—44年)、(5)幻滅の時代(1944—49年)、(6)敵視の時代(1949—)、と分類している。

なお、本稿での「アメリカ人」というのは、アメリカ国民一般を指すよりも、中国になんらかの関わりや関心をもったアメリカ人(宣教師、実業家、学者、外交官、ジャーナリスト等)を主として指している。

- (2) 前掲書『中国のイメージ』164頁、より引用。
- (3) 白神徹訳『支那の性格』(中央公論社 1940年)122-123頁。スミスの本は、中国人の習慣や性格に対するいら立ちと怒りの調子に満ちているが、他方で、彼は「中国人と接する態度において、西洋各国の行為には、ほとんど誇りにできるようなものがなかった」と自分たちを批判的にみるとともに、西洋人(アメリカ人)は、中国人の礼儀正しさや親考行、なかならず中国人の「生得的な陽気さ」や「持続力」や「無限の忍耐力」といったものを、あまり行きすぎない、それほど不誠実ではない形において有益に学びとることができるかもしれない(たとえば40頁)と述べ、中国人崇拜の源の一つを提供さえしている。また、彼が義和団の賠償金を返還し、中国人学生のアメリカ留学のために用いることに尽力したことについては、注(9)を参照。
- (4) 1854年から1882年までに、約30万人の中国人労働者が、主に西部の鉄道建設のためにアメリカに入国したという。可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』(岩波書店 1979年)を参照。アメリカ在住の華僑に関する包括的な研究としては、Jack Chen, *The Chinese of America*, San Francisco, 1980(中国語訳『美国華人』工人出版社 1984年)がある。また、中国においても、中国人移民の資料集が出版されている。陳翰笙主編『華工出国史料汇编』全十輯(中華書局 1984年)、とくに第一輯<中国官文書選輯>、第三輯<美国外交及公開文件選訳>、第七輯<美国与加拿大華工>。
- (5) ロバート・ローソン(Robert Lawson)の自叙伝(*At That Time*, New York, 1947)の一節。前掲書『中国のイメージ』133頁、より引用。
- (6) 前掲書 157頁。
- (7) 前掲書 158頁。
- (8) アヘン戦争について、たとえば、広東に居合わせていたウェルズ・ウィリアムズは、「アヘンを原因とした戦争は、その動機において明らかに不正である

が、…しかしながら、それでもなお、人類的な大きな立場からみれば、他の国と同等な交際を徹然と拒否する政府に対する有益な処罰であった」と書き記している。また、中国の宣教に関する代表的な歴史学者であるケネス・ラトゥレット (Kenneth Scott Latourette) は、「(アヘン貿易に対する)この憤激の中にも、開放された中国と、それが与えてくれるであろう機会への期待からくる、奇妙に矛盾した情熱が入り混じていた。アメリカ人たちは、その手段を残念に思いながらも、その目的に狂喜していたのである。」(*The History of Early Relations Between the United States and China*, New Haven, 1917, p.126) と述べ、「教会は西洋の帝国主義の一翼を担ったのであり、その結果についてある責任を免れることはできない」(*A History of Christian Missions in China*, New York, 1929, p. 280) と書いている。

- (9) アメリカの義和団賠償金の返還およびその使用状況については、東亜研究所『列国の対支投資(別冊)——列国の団匪賠償金処分状況——』(東亜研究所1941年)68-119頁、と阿部洋「義和団賠償金によるアメリカの対華文化事業」(同編『米中教育交流の軌跡——国際文化協力の歴史的教訓』霞山会 1985年、所収)を参照。

それによれば、アメリカは、1907年中国に対して「支那に対する深き友情の証左として、米国及び米国民が実際に蒙れる損害賠償額を超過するは之を法理上の負担から免除する」(『列国の対支投資(別冊)』74頁)ことを明らかにし、これを受け、1908年5月アメリカ上下両院の共同決議により、賠償金総額2444万ドルを1365万ドルに減額し、何等の条件も付けずに中国に返還することを決定した。この賠償金の一部免除の決定には、中国在住のプロテスタント系宣教師が大きな役割を果たした。その代表格であるアーサー・スミスは、当時中国人の間で盛況をきわめていた日本留学のあり方、その速成・低質の教育を批判し、「現在の中国の青年を教育することに成功する国は、将来その捧げた努力に対し、道徳的、知的ならびに経済的影響において最大の報酬を得る国となるだろう」(Arthur H. Smith, *China and America Today: A Study of Conditions and Relations*, 1907, p. 214) という考えから、中国人が本格的な勉強のためにアメリカの大学に留学することを奨励し、その手段としてまず義和団賠償金を中国に返還し、それを以てその費用とすべきであると主張した。ここからも、宣教師が中国に特殊な感情を持っていたことが窺えよう。

- (10) 数百万人のアメリカ人の献金は、年間約200—400万ドルに及び、中国人の救済、教育などに使われたという(前掲書『中国のイメージ』175頁)。また、ロックフェラーをはじめとする財団も病院や大学へ多額の寄付を行なった。ロックフェラー財団(The Rockefeller Foundation)の中国における活動については、レイモンド・B・フォスディック、井本威夫・大沢三千三共訳『ロックフェラー財団——その歴史と業績』(法政大学出版社 1956年)118—134頁、とK・C・イップ(土持ゲーリー法一訳)「民国期中国におけるロックフェラー財団の医療・社会活動」、細野浩二「ロックフェラー財団の対中国戦略——北京協和医学院の開設とその周辺」(いずれも前掲書『米中教育交流の軌跡』所収)を参照。

ロックフェラー財団は、中国に大きな情熱を注ぎ、中国人学生や教育者の海

外での研修のための奨学金を与え、また、科学教育の水準を引き上げるために、いくつかのミッションスクール（主として燕京大学、嶺南大学）に援助を与えた。さらに、30年代半ばには、国民政府の農村復興計画を援助するために財政援助を行なった。しかし、やはりロックフェラー財団の中国における中心的な活動は、北京協和医学院の開設であった。1913年財団として認可されるや、翌年11月には中国の医学教育活動の計画と管理のために、中華医療事業局（China Medical Board）を設立した。中華医療事業局は、欧米の優れた大学に引けを取らない一流の施設を中国に設立し、科学的医学の専門家を養成することを目標とし、2度にわたる中国医療調査団（1914年と15年）の派遣を経て、世界中の一流大学の卒業生を高給と恵まれた研究環境のもとに集めて、臨床診療、大学教育、医学教育、それに科学的研究を組み合わせたジョンズ・ホプキンス大学をモデルとした、59棟の建物をもつ北京協和医学院を1921年正式に開校した。そこまでロックフェラー財団が中国に情熱を注いだのは、たんに経済的目的からだけではないことに留意すべきであろう。極東におけるキリスト教伝導に関心を持っていたジョン・ロックフェラー二世（John D. Rockefeller）の中国医療に対する考えは、「私たちは別に中国における特定の問題にとらわれようとしているわけではありません。…中国には大きな機会があり、大きな必要がある、とのみ申したいのであります。」（1914年の財団の対華会議での挨拶、『ロックフェラー財団』39頁）というものであった。それは、「中国の正しい方向への発展を促進することは、単に中国自体や当代を益するのみではなく、全世界の幸福に対し、無限の未来まで重要な貢献をなすことである」（同上書121頁）という言葉に要約されよう。中国に対する姿勢は理想主義的なものであった。

- (11) 前掲書『中国のイメージ』179頁。
- (12) しかし、デューイの中国認識には、のちの中国革命の勝利を米中間係における「悲劇」とたらしめる、アメリカ人の中国経験・中国認識に共通してみられる楽観的見通し、現状認識の限界がやはり存在していた。それは、中国で彼を迎えたのが、コロンビア大学大学院での彼の教え子たちであったからかもしれない。彼らはいまや中国の主要大学・研究機関の指導者となっており、デューイの講演の企画、講演の際の通訳、中国に関する情報提供者として貢献した。こうして、彼は中国知識層の特定の一派と結び付いたために、時として彼に情報を提供している中国穏健派の考え方を繰り返すにすぎないことになり、また、極端な場合は、「外国人であるデューイが中国人読者に向かって中国における知識層の動向について解説する」という状況さえ出てくるのである。

デューイの中国認識の特異性が現れているのは、中国の問題解決のために「歴史的対比」を適用しようとしたことである。すなわち、「過去に起こった他国の出来事が現代中国の諸問題の解決に役立つこともありうる」と考えて、アメリカにおいて独立直後の各州が中央政府設立に反対した政治的経済的危機を共和制樹立によって克服したのと同じように、地方軍閥の割拠する中国においても連邦制を樹立することができる、と説いた。しかし、そもそもアメリカ史上における植民地同盟時代の政治的経済的混乱によって起こった問題と、20世紀中国の郷

紳、地方軍閥の権力によって起こった問題とを同等に扱うことができるか疑問の残るところであった。こうした、自らの哲学＝プラグマティズムをそのまま中国において適用し実践しようとする彼の志向は、アメリカの「自由主義者」の共通の性向であった。しかし、彼が中国のために何かなそうとしたことは、アメリカ人の中国への関心と好意を示すひとつの証左となるであろう。

上述のデューイの中国経験については、小林文男「“五四”時期中国のアメリカ教育思想—デューイの訪華とその役割をめぐって」、B・キーン（岡枝マリ訳）「ジョン・デューイの中国体験—その意味」（いずれも前掲書『米中教育交流の軌跡』所収）を参照。

- (13) Dorothy B. Jones, *The Portrayal of China and India on the American Screen, 1896—1955*, Center for International Studies, M. I. T., October 1955, P. 36. 前掲書『中国のイメージ』187頁、より引用。
- (14) バックは、生後間もない頃から中国で育ち、中国庶民の生活を同じ人間として深い感情で見つめていたけれども、同情と憐憫から抜けきれず、結局のところ中国民衆の内側にとけ込むことができなかった。後には中国革命の意味を理解できず、共産中国に反対の立場を採ることになった。こうした点で、スノー以前に紅軍の活動を生き生きと描いた作品（『中国の運命』Chinese Destinies, 1933, 『中国紅軍は前進する』Chinas' Red Army Marches, 1934）を発表していたアグネス・スメドレー（Agnes Smedley）は、バックの『大地』では知り得なかった新しい中国人の息吹をとらえた最初のアメリカ人であった。
- (15) 石垣綾子『回想のスメドレー（新版）』（三省堂 1976年）126頁。
- (16) 小林弘二『対話と断絶—アメリカ知識人と現代アジア』（1981年）21頁。
- (17) たとえば、1931年の満州事変に対して、フーバー大統領は「われわれの中国に対する義務、われわれ自身の利益、あるいはわれわれの威厳、それらのうちどれも、これらの問題に関し戦争の必要を認めていない。日本の行動は、アメリカ人の自由を損なったり、経済的・道徳的にわれわれの将来を侵害するものではない。であるとすれば、アメリカ人の生命を犠牲にすることはできない」（R. L. Wilbur & M. Hyde, *The Hoover Politics*, New York, 1937, p.600）という内容の覚書を提出したように、中国問題に対してアメリカの態度は受動的なものであった。
- (18) 当時アメリカでは、中国支援雑誌 China Today が刊行され、また、コーイ夫人の中国救援委員会（名誉会長はルーズベルト大統領の母サラ・ルーズベルト未亡人であった）が組織されていたという。1938年6月ニューヨークで開かれた中国支援集会の模様が、長尾龍一『アメリカ知識人と極東—ラティモアとその時代』（東京大学出版会 1985年）25—27頁に描かれている。
- (19) Leland Stowe, *They Shall Not Sleep*, New York, 1944, pp. 4—85, 前掲書『中国のイメージ』214頁、より引用。